わたしは世の光です　　ヨハネ 9:1～7

現代と違って、イエス様の時代には、目の不自由な人の多くは、ものごいをするしか生きる方法がありませんでした。ただユダヤでは当時は困っている人を支援することが当然のような社会でしたので今とは趣が変わっていると思います。エルサレムの神殿に通じる道にも、そうした人たちが大勢いました。イエス様は、その中の、ひとりの、生まれつき目の見えない人の前に立ち止まり、弟子たちも同じようにこの人の前で足を止めました。この人が生まれつきの盲人であることを、弟子たちが知ったのは、おそらく、この人自身が、「私は生まれつき目のみえない不幸な者です。いくらかのお金でも私にめぐんでください」と、道ゆく人々に呼びかけていたからではないかと思わされます。

弟子たちは、「この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したためか」という議論を始めました。ある弟子は「それは両親が罪を犯したためだ」と言い、別の弟子は「本人の罪のためだ」と言いました。他の弟子は、「人は生まれる前にどうやって罪を犯すのか」と言い出しました。しかし、このような議論は、議論している人は真剣かもしれませんが結局この人を苦しめるだけでした。目の見えない人は、その分耳がとても敏感です。弟子たちがひそひそと話していたとしても、何を話しているかは、はっきりと聞こえたことでしょう。「障がいは、罪の報いであり、呪いだ。」この人は、そんな言葉を何度も何度も聞かされてきました。そして、聞かされるたびに、「私は神からも見放されているのか」という気持ちになったことでしょう。つまり弟子たちが議論していたのは、この不幸な人を助けるためではなく、この人の不幸を題材にして宗教上の議論をするためだったのです。

世の中には、なんと多くの「議論のための議論」があることでしょう。現代は、みなが評論家になって、無責任なことを言うようになりました。ずっと以前は、自分の意見を発表するには、新聞や雑誌に「投書」するのが、ほぼ唯一の発表の仕方でした。しかし、インターネットやスマートフォンの時代になり、思いつくままのことを「ツィート」つぶやくことによって、まともな意見がかき消されるだけでなく、言葉の暴力で人を死に追いやるようなことさえ起こるようになりました。そこには、他の人を人として尊重する心が欠けているのです。イエス様は、「人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう」（マルコ 8:36）と言って、どの人の命も全世界よりも重いと教えています。また、使徒パウロは、「キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物のことで、滅ぼさないでください」（ローマ 14:15）と訴えています。弟子たちは、弱い立場の人を思いやることをイエス様の模範から学んでいたはずなのに、まだイエス様の心を自分たちの心とはしていなかったのです。

弟子たちは議論しましたが、結論が出ないので、「先生に聞いてみよう」ということになり、「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか」（2 節）と質問しました。「両親が罪を犯した」と言う弟子たちも、「本人が罪を犯した」と言う弟子たちも、イエス様が自分たちの味方をしてくれると思っていたことでしょう。しかし、イエス様はどちらも支持、サポートしませんでした。イエス様の答えは弟子たちの議論とは全く別のものでした。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（3 節）弟子たちは、この人の不幸の「原因」を、「過去」にさかのぼって問いましたが、イエス様は、神がこの人にしようとしていることについて話しました。「過去」のことではなく「未来」のことを、「原因」ではなく「目的」について語ったのです。

問題を解決するために原因を追求することや総括することは必要なことです。科学や技術の分野では特にそうです。何かの機械を作ったが、うまく動かないあるいはそれで事故が起きたといった場合は、いったいどこが悪いのか、部品のひとつひとつを点検し、その原因を追求します。そして、悪いところを修

理して、問題を解決します。社会のしくみでもそうです。株の値段がすごく変動して投資をしている人が損失をこうむると、なぜ、こうなったのかと調べて、誰かが株を操作している、いわゆる仕手筋とかインサイダー取引によるものであれば、不正な操作ができないように法律を作ったり、処分がなされます。会社でも、部下がとんでもないことをして会社の信用をなくすことがないように、取締役が監督します。それにもかかわらず、問題がおこったなら、なぜそうしたことが起こったかを調べて、それをチェックする制度をつくります。

同じように、人生のさまざまな問題においても、原因を追求して解決しなければならないものが多くあるでしょう。しかし、すべてが原因を追求すれば解決できるとは限りません。誰か他の人から、いわれのないことで被害をこうむった時、原因を追求することだけによって問題を解決しようとしたらどうなるでしょうか。自分に被害を与えた人物を憎み、「あんな人を信用するんじゃなかった」と後悔し、「結局、人生はうまく立ち回ったほうが得をするんだ」という結論に達するだけです。つまり根本的には強い人間不信感が増すばかりです。神への誠実も、人への愛も捨てた醜い人生が解決であるということになってしまいます。このような場合、「なぜそうなったか」ということではなく、「今、ここから、どうしなければならないか」を考えなければ、解決は見えてこないのです。

岩橋武夫という人をご存知でしょうか。岩橋さんは 1898（明治 31）年、大阪市で生まれ、1954（昭和 29）年、56 歳で亡くなるまで、日本の盲人福祉のために大きな働きをしたクリスチャンです。岩橋さんは、東京の大学で学んでいるとき、網膜剥離のため失明しました。彼は深く人生に絶望し、生ける屍のようになってしまいました。ある時、母親の「何でもよいから生きていておくれ。お前がいなくなったら、私は生きがいがなくなる」という言葉によって、「どんなことがあっても私は生きていこう」と決意するようになりました。その後、彼は盲学校で点字を習得し、点字で聖書を読むようになり、今日の 3 節「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです」とのみ言葉に触れたのです。点字ですから、文字通り、指でこの言葉に触れたのです。そして、この言葉もまた岩橋さんのたましいに触れたのです。そうです。私たちは聖書を読むと言いますが同時にみことばが私たちの心を読んでいるとも言えます。岩橋さんはこの言葉をきっかけにイエス・キリストを信じ、母親とともにバプテスマを受けました。岩橋さんは、後に、「この聖句によって闇の問題が一切解決された」と、自叙伝に書いています。岩橋さんはその後、関西学院で学び、さらにイギリスのエジンバラ大学に留学しました。修士号を得たのち英国の盲人福祉の実態を調査し、それを日本の盲人福祉のために生かしました。また、ヘレン・ケラーと交流があり、それがきっかけとなって「日本ライトハウス」を創設し、ヘレン・ケラーを日本に招き、彼女の伝記を書きました。神は、失明によって人生に絶望し、生ける屍となった青年を、目の不自由な方々が教育を受け、社会で活躍するために、用いてくださったのです。

私たちは、肉眼は開いていても、イエス様を信じるまでは内面の目は閉ざされていました。霊的に盲目で、聖書に示されている神の栄光も、愛も、見ることができませんでした。神が分からなければ、自分のことも、本当には分かりません。自分が神に造られたかけがえのない存在であることも、そうした存在として生きるため、罪を赦され、光を受けなくてはならないことも分からないままでした。しかし、信仰によって霊の目が開かれました。岩橋さんの肉眼は再び見えるようにはなりませんでしたが、その霊の目は開かれ、神からの使命に生きる生涯を送りました。イエス・キリストを信じる者には、障がいや苦しみは、その人を閉じ込める「牢獄」ではなく、そこから新しい人生を歩みだす、解放の「扉」となるのです。

さてイエス様は、地面につばきをして泥を作り、その泥をこの人のまぶたに塗りました。普通なら、「何をするんだ。盲人だといって馬鹿にするのか」と言いたくなるところですが、この盲人は、イエス様がな

すがままに任せました。なぜでしょう。「神のわざがこの人に現われるためです」との言葉を聞いて、自分の身に「神のわざ」がなされると信じたからです。目の見えないこの人には、自分に語りかけたのが誰なのかは分かりませんでしたが、「わたしは世の光である」（5節）という言葉も聞いて、自分に語りかけた人を信じたのです。そして、「行って、シロアムの池で洗いなさい」との言葉に従いました。全盲の彼がシロアムの池に行くのは大変なことだったでしょうが、彼は、語られた言葉に従うことによって、その信仰を表わしたのです。「信」という漢字は「亻」（にんべん）に「言」と書きます。信仰は、語られた言葉に信頼することから始まります。「信仰は聞くことか始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」（ローマ 10:17）とある通りです。この人は、語られた言葉によって、それを語った方を信じました。そして、シロアムの池で目を洗うと、なんと、すぐに目が見えるようになりました。ふつうは、目の機能が回復しても、ものがはっきり見えるまでは何日もかかるのですが、この人はすぐに目が見え、景色や家や人物を認識することができました。これは神のわざ、奇蹟です。私たちも、神の言葉に聞き、それに信頼し、従うなら、やがて、神の大きなわざを見ることができるようになるのです。

イエス様の言葉、「わたしは世の光」というのは、天地創造の第一日の光を思い起こさせます。イエス様はその「光」です。イエス様がつばきをして作った「泥」は、創造の第六日目に、人が土のちりから造られたことを思い起こさせます。「つばき」は口から出るものなので「言葉」を表します。世界は、言葉によって造られましたが、イエス様は「ことば」として、父なる神、聖霊なる神とともに世界を創造されました。イエス様は、この人の目を再創造して、完全な視力を与えました。この人の闇に光が照り、この人の世界は一変しました。この人にとって、それは世界が、もういちど新しく造られたのと同じでした。

しかし、なぜ「シロアムの池」なのでしょうか。エルサレムには、この人が目を洗うことができる池は他にも数多くありましたが、イエス様は「シロアムの池」を指定しました。それは、「シロアム」という名前には「遣わされた者」という意味があり、「遣わされた者」とは、神から遣わされた救い主、イエス様ご自身を指していたからです。

イエス様がこの盲人の目を開いたのは「仮庵の祭」の時と言われています。仮庵の祭りとはいわゆる「収穫祭」のことです。「仮庵の祭」の最終日には、祭司がこのシロアムの池から水を汲み、祭壇に注ぐという儀式が行われました。その儀式が行われた日、イエス様は「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」（ヨハネ 7:37-38）と人々に語りました。イエス様は、ご自分の命を「十字架」という祭壇の上に注ぎ、それによって人の霊の渇きをいやす者となりました。

イエス様がこの人を「シロアムの池」に行かせたのは、人は、イエス・キリストのもとに来てはじめて、目が開かれ、新しい人生を始めることができることを教えるためでした。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。…すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。」イエス様は「わたしのところに来なさい」と招き、聖書は「イエス様のもとに行きなさい」と命じています。もし、あなたが自分の過去を見る時に「なぜ？」「どうして？」と考えるなら、残念ながらそこには本当の解決はありません。自分を責めるか、他人を責めるという負のスパイラルが続くだけです。無力感や空虚な思い、あるいは怒りや憎悪の念が湧いてくるだけです。イエス・キリストは私のところに来るならばあなたを新しくし、あなたに本当の安らぎを与え、あなたを通して神の栄光を表わすと言われます。私たちも、ためらうことなく、イエス・キリストのもとに向かいましょう。そこで、光を受け、新しくされ、新しい出発をいたしましょう。祈ります。